
詩

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩

【Nコード】

N6892Z

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

時々、感情を音へ変換したもの。言葉の繋つなぎ。言葉はむずかしいので、読んでいただいた読者様にそれぞれの考えが持てるようなものを書けたらいいなーと思っております。それぞれに関連性はあまりありません。

底へ沈む。

罪を歌う僕がいた。罪を歌いながら、自分を苦しめていた。君は、ちよつとだけ笑った。

それは、待機中に散布して、やがて、淡く溶けて鈍色に輝いた。

僕は僕を知っていた。僕は僕を知っていた。

鳥に惹かれていた。僕は、音にならない泡をはくだけだった。

僕は僕を知っていた。僕は僕を知っていた。

想いは、ぎゅうぎゅうに締め付けられて、一つばかり眺めてしまつて、僕は溺れていく。

いらぬ、だけど弱い僕は、欲しい願う。鳥も、あたたかな日差しも。

僕がぎゅうぎゅうになるのは仕方なくて、僕がどんどん沈んでいくのも仕方なくて、僕は僕を戒めるために冷たい刃を突きつけた。

僕は僕を知っていたのに、僕は僕を知らないふりをした。

泡を吐き続けて、柔らかな日差しと美しい翼に魅入りながら、僕は沈んでいく。

罪を歌う僕がいた。罪を歌いながら、僕は刃を僕に向ける。

弱くて、弱くて、矛盾を求めて、弱虫な僕は、どんどん沈んでいく。魚のように青い宙ソラを泳げたならば、風のように碧い大地を駆け巡ることができたならば。

どれも叶わぬ夢を見て、眠るように、引き上げられる時を待っている。

永遠に目覚めぬかもしれない時をすごしながら、白んでいく視界を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6892z/>

詩

2011年12月23日01時48分発行